

ブックレビュー



『ゼロからの『資本論』』

斎藤幸平 著

NHK 出版 刊

定価 1,023円 (本体930円+税)

『人新世の「資本論」』（集英社新書）で一躍脚光を浴び、読書界を席卷した著者の『資本論』入門書だ。『資本論』第1巻の初版が刊行されたのは1867年。マルクスが往時の資本主義を解明した原書は、訳書も含め難解で知られている。

著者はマルクス経済学を専門にドイツの大学で博士課程を修了し、2018年に日本人初・史上最年少でマルクス研究の最高賞「ドイッチャー記念賞」を受賞している。1987年生まれの俊英で、現在は東京大学の教鞭をとるかたわら多数の著作を刊行し、メディアの注目度も高い。

時代を謳歌する資本主義、わけても現今の新自由主義に、著者が「待った!」をかける言説の原典にマルクスの『資本論』がある。本書での著者の挑戦課題は2つ。1つは難解な原典をいかにわかりやすく道案内するか。もう1つは「まったく新し

い視点で——「ゼロから、——読み直し、マルクスの思想を21世紀に活かす道」を切り開くことができるか。

そのための6つの柱は以下のとおり。「『商品』に振り回される私たち」「なぜ過労死はなくなるのか」「イノベーションが『クソどうでもいい仕事』を生む」「緑の資本主義というおとぎ話」「グッバイ・レーニン!」「コミュニズムが不可能だなんて誰が言った?」と続く。その最終コーナーで著者は、「商品や貨幣に依存しない〈コモン〉の関係性」を広げる視点から労働者協同組合の取組みなどを高く評価する。そして読者に期待を込め、次のように呼びかける。「今のような危機の時代にこそ、『資本論』を読んで、資本主義社会の「常識」を越えて、今とは違う豊かな社会を思い描く想像力を取り戻し、行動を起こすためのきっかにして欲しい」と。時代閉塞の現状を突破するその一歩が踏み出せるかどうかを問うている。

さんかいの げん
(山海野 玄)